

進路指導室から 第339号

はじめ

彼岸花が咲く季節になりました。彼岸花は、「まず花が咲き、後から葉っぱが伸びる」という通常の草花とは逆の生態をもっています。その葉と花を一緒に見ることがないことから、「葉見ず花見ず」と呼ばれ、昔の人は恐れをなして、死人花（しびとばな）や地獄花（じごくばな）などと呼ぶこともあったそうです。また、彼岸花といえば、赤色をイメージしますが、種類によっては、白色、黄色、クリーム色などがあります。そのうち赤色は、「情熱」「独立」「再開」「あきらめ」「悲しい思い出」「思うはあなた一人」「また会う日を楽しみに」の意味があるようです。

「九州大学工学部出張講義」について

以下の日程で、「九州大学工学部出張講義」を行います。

日時	: 10月18日（月）15:45～16:55
会場	: 本校視聴覚教室
講師	: 九州大学 大学院人間環境学研究院 都市・建築学部門 教授 神野 達夫 様
テーマ	: 「建築と地震」について
備考	: 現在は対面方式での実施を計画していますが、新型コロナウイルス感染症の状況によってはオンライン方式での実施に変更することもあります。

参加希望者は、進路指導室前に用意した参加申込用紙に必要事項を記入し、備え付けのボックスに提出して下さい。定員は、会場の都合上先着60名までとします。

「令和4年度大学入学共通テスト追試験」について

大学入学共通テストの追試験として、本試験（1月15日（土）・16日（日）実施）の2週間後の1月29日（土）・30日（日）に実施される予定です。文部科学省は、9月14日（火）に、新型コロナウイルス対策の一環として、県をまたぐ移動を避けるために追試験の会場を全47都道府県に設置することを発表しています。

「大学別過去問・個別大学模試の取組」について

この時期ともなると、過去問に取り組んでいる受験生もいるかと思います。また、今月下旬から個別大学模試が始まります。しかし、ただ大学別過去問や個別大学模試に取り組んでも効果はありません。やはり、取組の目的を考え、意識しながら実践することが求められます。

『蛍雪時代 9月号』に、駿台教育研究所進学情報事業部長 石原 賢一さんによる「“模試・過去問”で合格をつかむ 7つのポイント」の記事が掲載されていました。下記は、受験生に参考にしてもらいたい点をまとめています。

Point 1 偏差値よりも“素点”に注目！合格の伸びしろを見つける

模試の結果では偏差値や判定に意識がいきがちですが、偏差値はあくまで統計的・相対的な数値であり、大事なのは素点です。科目ごと分野ごとに自分がどの程度の点数をとれているのかを、平均点との差や科目・分野間の凸凹にも注目しながら客観的に把握しましょう。その際には、模試の問題・答案をあらためて見直して、ケアレスミスで失点した問題や逆にまぐれで正解した問題をチェックし、より実力に近い点数を出してから再判定するとよいでしょう。

点数の低い科目・分野や平均点の割に点数がとれていない科目・分野は、今後力を入れて勉強すべき部分です。足を引っ張る科目は本番で致命傷になりかねないので、得意を伸ばすより不得意を補強することに意識を向けましょう。

Point 2 科目間のバランスや分野・設問別の成績に注目！

受験勉強では不得意科目・分野をなくすことが重要なので、科目ごとの得点状況のバランスを意識しましょう。現役生は理科、地歴・公民の完成時期が遅いので、現時点で他科目より点数が低くてもそこまで気にする必要はありません。一方、国語が弱いのは要注意。共通テストをはじめ近年の入試では科目を問わず読解力が求められる傾向があるので、国語が弱いと全体に悪影響を及ぼしがちです。

Point 3 本番の解答戦略を試行錯誤し、問題の見極め力をつける

過去問は、志望校の出題方式や傾向の把握に加え、本番の解答戦略を立て、それを試すために活用しましょう。制限時間内に最善の結果を得るためには、どの順序で解くか、どの問題にどれだけ時間をかけるか、必ず得点すべき問題はどれか、解けなくてもかまわない難問はどれか…といったことを即座に判断しながら解き進める必要があります。この戦略を見誤ると、大きな失点につながりかねません。

Point 4 A判定は要注意！D・E判定でも可能性は十分にある

模試の判定はあくまで目安なので、一喜一憂しないこと。特にA判定のぬか喜びは大変危険です。現役生はA判定が出て、偶然調子よかっただけ、もしくは、志望校のレベルが自分に合っていないのだと受け止めましょう。母集団のレベルが低い模試だった場合もあり得ます。A判定でも不合格になる人はいるので、絶対に気を抜けません。B判定も同様です。

一方、C判定はチャンスだと、私は考えています。合格可能性が50%程度というのは、意欲をかき立てるのに最適です。その模試で明らかになった弱点を補強すれば、次はもっと点数が伸びるはずですよ。

D判定、E判定だっていけます。補強すべき箇所が多く厳しい道のりではありますが、可能性はまだあります。特に現役生は、最後の最後まで伸びます。9月、10月は夏に受けた模試が返却され、思うような成績を出せずに落ち込みがちです。志望校の難易度を下げようとする受験生も出てくる時期ですが、ここが踏んばりどころ。受験勉強を始めてから成果が出るまでには半年ほどかかります。つまり、10月以降グッと成績が伸びてくるのです。あきらめず、腐らず、頑張ってください。

□ 模試の判定はこうとらえる！

A判定 (80%)	= Abunai (危ない!)	油断は禁物！A判定でも合格するとは限らない…
B判定 (60%)	= Bibire (ビビれ!)	
C判定 (40%)	= Chance (チャンス!)	合格圏へもうひと頑張り！課題がわかってラッキー！！
D判定 (20%)	= Daijyoubu (大丈夫!)	現役生は最後まで伸びる！可能性を信じて頑張ろう
E判定 (20%未満)	= Ekeruzo (いけるぞ!)	

Point 5 過去問演習は「量」より「質」。1題1題の理解を深める

過去問演習について、「何年やればいいのか？」という質問をよく受けます。目安としては過去5年分くらいですが、国語や英語は余裕があればもう少し遡ってもよいでしょう。国公立大の志願者は、志望校の過去問に加えて、同レベルの過去問を解いてみるといいと思います。注意点としては、何年分解くかという「量」ではなく、同じ問題を何度も解いて理解を深める「質」のほうが重要だということ。解いたことがある問題を再度解くことに抵抗があるかもしれませんが、実際は1回やったからといって解けるとは限らないものです。演習後の復習も怠らず、ただの答え合わせで終わらないよう解説を読み込みましょう。

Point 6 過去問だけに偏った学習はNG！演習と基礎固めの往復を

過去問をひたすら解くだけの勉強では、難関大入試には対応できません。過去問演習を通して志望校の出題傾向を把握したり本番に備えたりすることは重要ですが、基本となるのは高校3年間で学んだことの復習です。教科書も侮ってはいけません。問題演習と基礎固めの往復により、成績は上がるのです。過去問演習や模試で明らかになった「できていないこと」を単元や分野ごとに書き出して可視化し、そこを徹底的にやりましょう。おすすめなのが、参考書の目次をコピーして、単元や分野ごとに自分の理解度や到達度を○×△でつけること。×を△に、△を○にすることを目標に、不得意分野を補強していきましょう。

Point 7 本番に備えて、丁寧なマーク記入を十分に意識する

模試の成績表でダブルマークや無回答になっている箇所は要チェック。マークシートの塗り方が薄い（筆圧が弱い）、消し方が甘いなどの理由で、機械で正しく読み取れないケースが多くあります。せっかくの努力が水の泡とならないよう、マークを丁寧に記入することに、あらためて意識を向けてほしいと思います。演習時の記入練習も有効です。

終わりに

上記で紹介させていただいた石原さんは、大学受験の世界では言わずと知れた存在です。本校でも過去に講演をしていただいたことがあります。的確な指摘やアドバイスは、長年のご経験とエビデンスとなるデータの集積によるものだと思います。

(文責：進路指導部 池本 邦彦)